

佐川は、藤山建設の羽田宛にメールを送信すると、その後、柴田設備の岸田に電話を入れた。

「はい、柴田設備でございます」

「白石工業の佐川と申しますが、総務部の鈴木さんをお願いします」

「少々お待ち下さい」

「はい、総務部です」

「白石工業の佐川と申します。いつもお世話になっております。恐れ入りますが、鈴木さんをお願いします」

「申し訳ありません。鈴木はただ今席をはずしておりますが」

「何時頃お戻りになりますか？」

「今日は一日、平塚の本社へ行っておりますので、恐らくこちらへは戻ってこないと思います」

「そうですか。明日の予定はいかがでしょうか？」

「明日は八時半にはこちらへ出社する予定です」

「では、明日の朝でも構いませんので、藤沢支店の方にお電話いただきたいとお伝え願えますか？ 一応電話番号を申し上げます。〇四六―六三八―八七三八です」

「〇四六―六三八―八七三八ですね。失礼ですが、お名前をもう一度お願いします」

「白石工業の佐川です」

「白石工業の佐川様ですね。明日の朝、鈴木に申し伝えます」

「よろしく願います」

「失礼します」

受話器を置くとすぐに佐川の電話が鳴った。

「はい、佐川です」

「藤山建設の羽田です。お世話になっております。先程送っていただいたメールの件でお話したいことがあるのですが、今お時間は大丈夫でしょうか？」

「すみません。この後ちよっと打合せが入っているんですよ。先程のメールですが、一応大まかな部分についてだけ先に目を通していただこうと思って送らせていただいたのですが、詳しい内容については一度お会いしたうえで、と考えております。如何でしょうか？」

「はい、構いません。明日以外でしたら私はいつでも結構ですので、佐川さんの都合のいい日に合わせます」

「それでは、来週の水曜日はいかがでしょう？ 八月三十一日ですが」

「はい、大丈夫です」

「では大変申し訳ありませんが、時間と場所については近いうちに追ってこちらからご連絡するということですのでよろしいでしょうか？ 勝手言っすみません」

「とんでもないです。携帯のほうにかけてもらえれば、いつでもつながりますので」

「わかりました。では失礼します」

佐川は電話を切ると、慌てて応接室へ向かった。